

『宇宙船ビーグル号』のあらす じとメモ

takaidos

memo

A.E.ヴァン・ヴォクト。

1950年発刊。

浅倉久志・訳。

1978年。

宇宙で次々と4種類の圧倒的な知的生命体に出遭う。

人類対異星生物。アメ・コミのようなストーリー。

疑似科学や概念的な手法の展開で、科学に対する関心を煽る。

最初の話「イクストル」は映画『エイリアン』のヒントになったらしい。

もしかしたら『エヴァンゲリオン』『テラ・フォーマーズ』など、この作品の影響を受けている？

ストーリーのパターン。

人類の叡智より優れて生物が現れる。

↓

コミュニケーション・分析を試みる。人間、油断。

↓

怪物が生物と思えないような能力を発揮して犠牲者が出る。切迫した事態に陥る。

↓

人類、それぞれの分野の専門家が知恵を集めて対策会議。

↓

人間同士の葛藤、主導権争い。

↓

循環的史観考察と情報総合学による、理論的な方法で解決ないし危険回避。

面白いのは科学者の集団でそれぞれのチーフが知恵を出し話し合っって合理的な解決策を出し対応すること。

旧大日本帝国とはまったく異なる。

グローヴナーが情報総合学をみんなに理解してもらえるように、掲示板に講習の案内を貼り出して人を集めたりしていること。

<目次>

※元は4つの中短編。

エリオット・グローヴナーと情報総合学を中心に再編(訳者あとがきより)。

黒い破壊者(Black Destroyer,1939)

神経の戦い(War of Nerves,1950)

緋色の不協和音(Discord in Scarlet,1939)

M-33星雲(M33 in Andromeda,1943)

訳者あとがき/浅倉久志

<登場人物>

エリオット・グローヴナー:35歳?情報総合学者。催眠学習。冶金学少々。主役。

カリタ:日本人。歴史・考古学者。循環的史観。副主役。

ハル・モートン:探検隊長。数学者。

グレゴリー・ケント:小柄だが親分肌。化学部。次期探検隊長に立候補。用心深い。

リース船長:軍人。大佐。恒星間宇宙船スペース・ビーグル号の船長。

ペノンス:機関長。

シーデル:心理学者。

ジャーヴィー博士:化学者。クァールに殺される。

スミス:生物学者。

グアリー:通信技術部長。

エガート:医師。

ブレクンリッジ:冶金学。クァールに殺される。

セレンスキー:パイロット。

フォン・グロッセン:物理学部長。

マッキャン:地質学者。グローヴナーの講習を受ける。

ガンリー・レスター:天文学部長。数理天文学。

フォン・グロッセン:物理学者。

ケリー:社会学者。

ジラー:冶金学者。

ミーダー:植物学科長。

<あらすじ>

宇宙船ビーグル号、銀河系の外に遠征した人類初の宇宙船。

船内総床面積5km²、30階。

乗員1000名。軍人180名、科学者804名。行政部16名？

①クァール(元の文明を築いた建設者たちの実験生物。猫型知的生命体)との出遭いと退治。
ケント派による選挙運動。

②グローヴナーによる情報総合学と催眠学習。

リウム人(人間の精神にテレパシーで干渉できる。鳥型知的生命体)による催眠干渉。

船員同士、互いに武器を取って同士討ちの戦い。

グローヴナー、脳波修正装置で催眠干渉をブロックしリウム人に遠隔で干渉を止めるよう説得。

③イクストル(真紅。宇宙空間でも生身で生存でき物資を貫通できる生物。壁をすり抜ける。人体
内への産卵。電子、原子の操作。滅んだ惑星グロル出身)との遭遇と追い出し。

④アナビス(宇宙塵型知的生命体。ガス生物。島宇宙全体に膨張・存在し物質の長距離転送や人類
への遠隔操作？も行える。ほかの惑星文明を滅ぼし、ほかの知的生命を捕食することでその知識
も吸収して来たり、別の惑星の密林層を引き剥がして滅ぼした惑星を覆うなどのことも出来る。)。
アナビスはビーグル号船内にいるグローヴナーの意識に「引き返せ」と訴えて来たり、数百光年
前から宇宙船内にどこかの惑星から原始恐竜？を瞬間転送させて来た。

グローヴナーによる船の指揮権の掌握。

対アナビス戦のために宇宙船の探検期間を5年延長。

アナビスを放射性物質を撒く宇宙魚雷の製造と宇宙空間への発射・拡散をして、アナビスの食糧
を破壊。

アナビスを地球から引き離し飢え死にさせるために宇宙船ははるか宇宙の彼方、NGC-50347星雲
に向けて航行。

グローヴナー、船員に対する情報総合学の講義。

クァールによる犠牲者24名。

リウム人による犠牲者32名。

イクストルによる犠牲者30名ほど？

アナビスによる犠牲者0名？

<メモ>

情報総合学=応用全体学～ネクシャリズム。

「知識と存在の個室に分割された生命と物質を自然の全体系として捉え直す。」

循環的史観～どの文明も似たような発展段階、興隆、衰退期を踏む。宇宙で新しく出遭った文明や遺跡がどの時期に相当するかを論じる。

(例)

古代回教文明はツールの戦いを転機に瓦解した。

「結果としての死は、案外、異常な危険に対して融通性にある態度をとれない、こうした人々の上に降りかかるのではないか」

～知的生命体クアールが武装した人類の宇宙船に堂々と戦いを挑んで来たに放ったリース船長の言葉に対して思ったグローヴナーの考え。

「これまでの記録が示すものは、原始的で自己中心的な精神の低級な狡猾さのしわざなのです」
～不死身と思われるクアールに対するカリタの評価。

過去200年の恒星間遠征隊のうち、まる50%が帰還しなかった。

その理由は宇宙船内であった出来事から類推するしかない。

記録で見る限り、それは隊員間の不和であったり激しい論争であったり目的についての意見の衝突であったり、そして分派の結成だった。

→

解決のために、指揮者を選挙制で選ぶことにした。

カリタによると、宇宙船内は循環的史観によると冬段階。

どの探険船も乗組員には知らせず社会学的な実験場にされていた。

無数の小さな変革が人種の宇宙空間への進出をより犠牲の少ないものにするためにテストされているのだ。

カリタによる説明

「文明の冬期に見られる顕著な共通因子は一般大衆が物事のしくみに対して、次第に理解を拡げて行くことです。

人々は、彼らの心や肉体、そしてまわりの世界がどう動いているかについて、迷信的な、あるいは超自然的な説明だけでは飽き足りなくなる。知識の漸進的な積み重ねによって、単純きわまる

頭の持ち主でさえ、ここではじめて真相を見る目ができ、少数者の世襲的優越性という主張を意識的に拒否する。

そして、平等のためのきびしい戦いが開始される。

この個人の権利拡張のための広範な闘争が、有史以来、あらゆる文明の冬期に見られる、もっとも重要な共通点なのですよ。

その良し悪しはともかく、この闘争はふつう、地位の安定した少数者を擁護しがちな法体系の枠内で起こる。

そして、新興階級自己の動機を理解しないまま、盲滅法に権力闘争に飛び込んでしまう。

結果は、未熟な知能の文字どおりの乱闘です。

経緯と利欲かられて、人々は彼らとご同様に混乱した指導者に盲従する。

その結果としての無秩序は、これまでも再三、決まりきった段階を経て最後の静的な終末期農民(フェラッハ)状態を招いて来た。

まずは遅かれ早かれ、ひとつのグループが支配権を握る。

いったん政権をとると、指導者たちは、民衆がおびえすくむような残虐な流血で秩序を回復する。

すかさず権力集団は行動の制限に出る。

認証制度や各種の規制手段は、組織社会である以上必要ですが、これが弾圧と独占の道具に化けてしまう。

個人が新しい事業を始めることは困難になり、ついで不可能になる。

という調子で急速な段階を経て、古代インドでもお馴染みのカースト(身分階級制)に進むか、あるいは、それより馴染みは薄いが膠着した社会、たとえば紀元300年以後のローマ帝国のそれのようなものへ進んで行く。

個人は生まれついた身分に制約され、それ以上にはのぼれない...。」

グローヴナー「人工的な補助手段のいない読心能力を持つことはどんな効果その文化に及ぼすか？」

カリタ「ひとの心を読む能力が他人のことは知り尽くした感じを抱かせる。それに基づいて絶対の確実性からなる体系が発達して行く。すでに知っている(と思っている)ことをどうして疑うことができます？そうした生物は、文化の初期の各段階をいっきに通り抜けて、最短時間で終末期農階段に達するでしょう」

地球と銀河の諸文明は自己を枯渇させ、終末期農階段の沈滞に陥って行った。

終末期農民型の人間は新奇なものや変化を嫌う。

彼らは集団として特に残酷ではないが、貧困という原因から、個人の苦しみに対してふつう無関心になりがちなこと。

生物学者スミス

「きみは人間が完全無比な正義の化身だと思い込むあまり、そこに長い野蛮な歴史があったのを忘れてしまったんだ。

人間は食べるためだけでなく、慰みのためにほかの動物を殺して来た。

隣人を奴隷にし、対立者を殺し、他人の苦しみを見ることに、邪悪で嗜虐的な喜びを味わって来た。

われわれがこれからの航海で、人類よりはるかに宇宙の支配者としてふさわしい、ほかの知的生物に出会うことも充分にありうるんだ」

グローヴナー

「技術者型が弱いのは科学的手法に忠実過ぎるからじゃないんです。

原因はその清潔さにあるんですよ。

つまり寝技をかけてくる相手以上に、その術策はしりぬいているが、おなじ手で報復するのは誇りが許さないんです」

「肉食獣から餌を取り上げてみたことがありますか？

相手は取られまいと餌にしがみつく。」

「なぜおのれの住む世界の空を、迷信と無知に曇らされた目で眺め、重大な問題を他人の言葉に動かされて判断したりするのか？

地球古代の諸文明の滅亡は、人々が盲目的に状況に反応した場合や権威主義にたよったときにどんなことが起こるのかの見本なのです」

「まずは人間を懐疑的にしなければならない。

具体的な証拠を見せられないと納得しない、無学だが利口な農民、これが科学者の精神的祖先でした。

あらゆる理解のレベルについて言えることですが、懐疑的な人間は専門知識の不足を、"まず見せてみる！なんでも受け入れてやるが、言葉だけでは納得できない"という態度で埋め合せているのです」

ガジェット

反加速航法

超音波銃

原始砲

透明カメラ

熱戦砲

訳者あとがき。

ヴォクトはアメリカより日本やフランスで名が知れている。

ハインラインやアシモフより科学的信憑性は低いが、その疑似科学によって独特の情感を出している。

→まさに！